1985年5月25日第三種郵便物認可　2013年10月1日発行（毎月1回1日発行）通巻528号

福祉のひろば

10
2013

特集
生活保護利用者はふつうに生きてはダメなのか？

ひろばトーク
漫画家　さいき　まこさん
『陽のあたる家　～生活保護に支えられて』

編集　総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒　604－8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町１０
代表取締役社長　　川下　晃正
ＴＥＬ　（０７５）２１１－７２７７
ＦＡＸ　（０７５）２１１－７２７０
http://www.kyoto-archi.co.jp/

インターネットを使って、個人や職場での情勢学習を！

「社会保障制度改革国民会議報告書」を読む

パソコン タブレット スマホで

石倉康次　総合社会福祉研究所理事長（立命館大学教授）

http://www.youtube.com/user/sosyaken

【お知らせ】

◆オンラインストア「福祉のひろばオンライン」からの
雑誌･書籍のご注文は、**クレジットカード決済にも対応！**

◆「福祉のひろば」を**電子書籍版**でもお読みいただけます！

http://www.sosyaken.jp/hiroba/

お問合せ ➡ ㈲福祉のひろば　TEL・FAX06-6779-4955

生活保護利用者は普通に暮らし、生きてはダメなのか？

大阪市西成区に住む田口行義（ゆきよし）さん。1921年高知県室戸に生まれ、子どもの頃、父の仕事の関係で静岡県浜松に移る。徴兵で甲種合格し、1942年南方に出征。トラック諸島で終戦を迎え、横須賀の浦賀港にたどりつき、浜松へ帰る。戦後は長い間マグロ漁船等に乗っていたが、その後親戚を頼って大阪に移り、印刷工場に勤める。しかしうまくいかず、日雇いで食いつないだがその仕事もなくなり、ホームレス状態に。何度か自殺を考えたことがある、と言う。

田口さんが介護や医療を利用している西成民主診療所の山田ケアマネジャー（写真右）。

田口さんは、生きるための制度を長年知らないまま、80歳過ぎまで働きつづけた。ようやく生活保護制度の利用につながり、日々の安全が保たれる住居での生活に戻る。しかしここ１～２年、足腰が弱り、外出も減った。診療所のデイサービスやホームヘルプ、訪問看護などを利用しながら、ひとり暮らしの毎日を送っている。

「コレッて、何か楽しいことと言われてもなぁ。テレビを見ることぐらいかなぁ」

支給明細を見ながら、「何ってお金を使うこともなく、生きている。こうして生きられるのも、ありがたい」と言う。週４回のホームヘルパーの訪問が人との会話の機会。時々のデイサービスでの入浴も楽しみの一つだが、最近はふらつきがあり、「難儀なことだ」と。

田口さんは、昨年まで別のアパートの２階に住んでいた。足腰が弱り、ふらつきも出てきたので、山田さんが今のアパートに移ることを提案。向かい合って建つアパートには、ひとり暮らしの高齢者が多く住んでいるが、日常の交流はない。日本は高齢の生活保護利用者が多い。暮らしていける年金制度が確立していないからだ。高齢の生活保護利用者の多くは、戦前戦後の困難を乗り越えて、街の中でひっそりと暮らしている。　（写真・文　下野祇園）

福祉のひろば
2013年10月号

【ひろばトーク】
『陽のあたる家〜生活保護に支えられて』
連載にあたっての思い　さいき　まこ　6

●特集●　生活保護利用者はふつうに生きてはダメなのか？
知ってほしい！　私たちの生活と思いを――利用者からの発信　10
生活保護利用者の生活実態と福祉事務所職員の役割　寺内　克憲　16
生活保護費引き下げと利用者の怒り　松田美由紀　21
私の出会った子どもたち、そして「ホームレス」者　仙田　富久　25
かつてない生活保護大改悪にどう立ち向かうか　吉永　純　31

●トピックス●
保育の待遇改善は存続の死活問題　仲井さやか　44
―「いつまでも働き続けたい」―
“社会福祉の保育”に株式会社が事業参入？　黒田　孝彦　50

●連載●
フォーラム
夏のサハリン（樺太）を訪ねて　上坪　陽　54
連載　小川政亮　第二部　自伝（19）　小川　政亮　56
金沢にて（中）
相談室の窓から
手厚いケアのある居住の場を（3）　青木　道忠　60
わらじ医者　早川一光の「よろず診療所日誌」　早川　一光　62
育つ風景　清水　玲子　64
「よく生きてここまでたどり着いてくれた」と思う子どもがいます
いっぽいっぽの挑戦（7）
「制度のはざま」を見つめて　繁澤　多美　66
映画案内　『無言歌』　吉村　英夫　68
現代の貧困を訪ねて　生田　武志　70
自衛隊と貧困
なにわ銭湯見聞録（六）　ラッキー植松　72
いただきます！
みんな大好き　ローストチキン　なかよしすみれ保育園　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　52／今月の本棚　43／福祉の動き　78
●グラビア●　生活保護利用者は普通に暮らし、生きてはダメなのか？

●表紙の絵●
神門やす子

●カット●
川本　浩

ひろば トーク

『陽のあたる家 ～生活保護に支えられて』

連載にあたっての思い

漫画家　さいき　まこさん

昨年の「お笑い芸人バッシング」以来、生活保護には「負のスポットライト」が当たり続けています。バッシングする人たちは、生活保護など自分には無関係なことと思っているのでしょう。

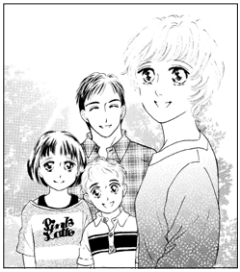
が、バッシングも、保護費の引き下げも、私にとっては身に降りかかる火の粉でした。

私は学校を卒業して以来、働かずにいた年はないのですが、残念ながら将来のためには国民年金しか備えられていません。いずれ働けなくなったら、年金で不足する分は生活保護を利用するしかありません。

ですが、生活保護の利用には、水際作戦やスティグマなど、いくつもの壁があります。一番大きな壁は、扶養義務者への圧力です。

私は現在、息子と二人暮らしです。彼が大学を卒業したら、独立させる予定です。が、もしも将来、私を扶養せざるをえなくなったら、彼は自分のために人生を生きることはできなくなるでしょう。結婚できないかもしれない。既婚であったら、配偶者と揉(も)めて離婚に至るかもしれない。子どもをつくることを諦めることになるかもしれない。子どもがすでにいたら、その子は希望通りの進学ができなくなるかもしれない。さらには私の介護のために、息子は転職、退職を選ばざるをえないかもしれない――。我が子をそんな目に遭わせたい親が、いったいどこにいるでしょう。そもそも私は、自分の扶養をしてもらうために子どもを産んだわけではないのです。

「ならば死ねよ。将来に備えられないのは自己責任だろ?」――それがバッシングする人たちの「論理」です。



©さいきまこ
（秋田書店「フォアミセス」）

さいき　まこ
漫画家。主な作品に、発達障害を題材にした『魔法なんかじゃない』、先天性四肢障害を描いた『天使のてのひら』などがある。『陽のあたる家　～生活保護に支えられて』を、秋田書店「フォアミセス」2013年８月号～10月号にて連載。

けれど、これは私ひとりの問題なのでしょうか。働けなくなった時に、身内にも社会保障制度にも頼らず生活していける人が、この先いったいどれだけいるでしょう。それが叶わない人たちは、みんな死ななければならないのでしょうか。

仮に扶養を引き受けてくれる身内がいたとして、その身内が扶養のために、さまざまなことを諦めることになったとしたら。それは本人が苦しむだけではなく、社会にとっても損失となるはずです。

そんなことがあっていいはずがない。生活保護への偏見をなくし、だれもが利用しやすい制度にしなければ――。『陽のあたる家』は、このような思いから企画を立ち上げ、連載に至りました。勤勉な一家が貧困に陥り、生活保護を受けて生活再建していく中で味わう、さまざまな思いを描いています。連載三回分を通して読んでいただければ、たいていの人はバッシングする気持ちをなくすものになっている、と自負しています。

もしかしたら「きれいごとだ」と感じられる方もいらっしゃるかもしれません。今回の連載をとっかかりに、今後は「きれいごとではすまない現実」や、「貧困の源」にまで切り込んでいきたいと思っています。生活保護制度をめぐる問題はあまりにも深く、いくら描いても描ききれるものではないことは承知しています。それでも、学びながら悩みながら、描き続けていきたいと思います。

まずは、今回の連載作品をできるだけたくさんの方にお読みいただければと願っています。どうぞよろしくご笑覧のほど、お願いいたします。

特集

生活保護利用者はふつうに生きてはダメなのか？

政府の生活保護制度の大幅な抑制や後退、その動きを補完し、時に先導するマスコミのバッシングは、生活保護制度を意図的に慈恵的制度に後退させ、利用者を「自立しない人」へと変質させ、今でも孤立しかけている利用者を社会の後景に追いやろうとしている。

朝日訴訟をはじめ、多くの生存権裁判や個々の闘いを通して、私たちは貧困者の人としての生活を過ごす権利を求めてきた。しかし、貧困格差社会は、一歩下がりながらも懸命に生き続ける人々に、鉈（なた）を振りかざし、消費動向や物価是正という欺瞞（ぎまん）で否応なく支給額を八月から引き下げた。下げられた金額はお米の購入額とほぼ同じ。ということは、主食を我慢せよということか？　戦後、結核患者が「一日の栄養価を保障せ